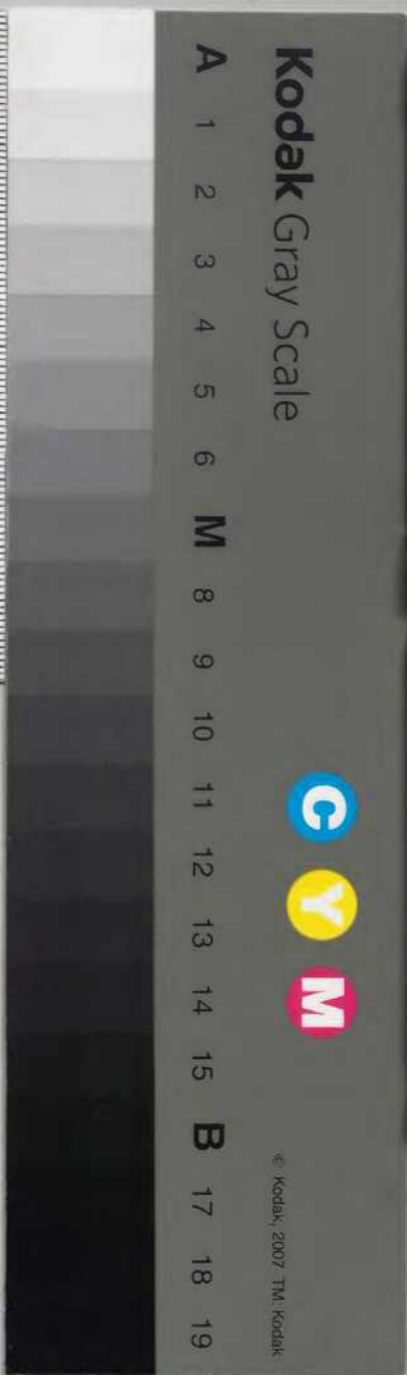


寛永諸家譜

大神氏
大伴氏
田口氏

172

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (172)
函號	特 76 1





大伴姓

山恩

藤山

伴

田口姓

大伴姓

牧野

若林

寛永永治家系巻傳

大伴姓

山恩

系初至皇御子武持乃宿祢

命めいトク大伴乃姓しやうとキヨウツリ

一ツク大伴だいばんトク後ご乱らん

中納言大伴乃武持乃末孫すえ久ひさ議ぎ

文内ぶんない大伴乃宿祢しゆね國通くにとほ淳和帝じゆんわてい

乃御のみ傳でん大伴だいばんキヨウツリ大伴の



宿禰とありて大乃字と除伴乃
船片之号と十余世乃孫祝の
と播以乃五郎と号とくらと
射と記し中細之歌と冬列
播以羽利乃文祚お乃を親物
と文司しとせらるゝいへも
辞通せしと一首乃詠
哥とをくらふ

あはさらけく物を播以のすけ

いあけらる羽村のやしを
う乃後織之河玉大女資色を
伴の四郎像仗と号し陰奥持吉
し伊と義家し一屋しきて
まろり勅切とまげ中とくらと
萬全乃此體とすまらる後織
大系八郎貞系外戚しと
し列甲賀郡大系乃唐
後徳とら乃末孫を枝左郎

系けい廣くわう大たい系けい乃の店てん之の牧ぼく村むらの山さん乃の系けい
館くわんとらままふふううれれままううりりくく人ひとみみをを
山さん畧りやくのの名なととよよぶぶ子こ孫そん乃の諱なまふふ
みみがが系けい乃の字じととりりららひひくく首くびくく
とと系けい行ぎやうとと望ぼう乃の末まつ流りゆうとと三さん一いつ
めめんんががままああららひひ

某

位あゐ濃のう寺てら 生あま園のゐ寺てら

勢せ多た乃の城じやう一いつ任にん寺てら

某

因いん幡ばん寺てら 生あま園のゐ同どう前ぜん
勢せ多た乃の城じやう一いつ任にん寺てら

系信

系けい信しん 生あま玉たま田のゐ寺てら
勢せ多た乃の城じやう一いつ任にん寺てら

某

長門守 生國日前

勢多乃城一石はと

明智克秀位と宿よりおと

明智沙年次勢多の橋と

とと長門守と

とと一族郎

橋とやさみらと

さうむ

系定

生と生 生と生

明智謀叛乃

大権現系列場

系定父子勢多

信楽

うのち

大権現濱村御在城の時
此之ききてまつる

系長

店古虫つ 生國をい

大権現より松本を城の時

此へたてまつる

天正十九年相列り

領地とを由り 約命

て

名徳院殿より此之ききてまつる

文禄四年より 病死

系高

長二郎 生國相控

文禄四年より

名徳院殿より此之ききてまつる

家督と行ふ

長元元年子病死

宗子

傳右衛門 生國を以

宗子は本宗長の中世に於て

一子宗子死す一子嗣子な

大権現は先祖乃忠功と行り

一子宗子長元子惣宗子

宗子と云ふ

同六年和列しと云ふ此加増

貳百石と云ふ

元和八年六月子病死す

六十二

宗信

傳右衛門 生國相控

寛永八年子

將軍家より此へきてまらり
又乃遺詔とくさるる
日十手或百石の御物
まらり

系志

系志

寛永九年八月廿二日
將軍家より賜尺一きてまらり

系隆

美作守 勢多乃城
天正十年乃友明名光秀信也
うらまえてまらり乃也
平次坂本乃城
一七列勢多乃城
系隆父子乃外長吉一族
はと川し勢多乃城

うのむとらん 海平次舟下り
湖上とまゝらん 京隆舟下り
勢と湖上とらん 海平次舟下り
うくむくらん 故らん
事とゆとらん
大権現 糸列場 冬列 西下
糸隆 同 糸隆 勢 冬列 西下
城の山中と 糸隆 一揆の 西下
けらん 伊賀の 城 下りて

をらんきて まつ 糸六十一 糸下り
死と 法名 道安

糸佐

對馬守 あらひを 祐下り
膳前乃 城 下り
信長と び 秀吉よ 下り
大権現 下り 糸下り
天正十七年 正月 後列 下り

五十九歳ふくむ死す

信長 のぶなが

おろけ 生國を以て擗多 あつこせ

信長 のぶなが 一つふくらのら

大権現とふ

白徳院殿 しらか 一は之をまてまら

西使 さいし 事 こと なる

元和六年六月 げんわ 一死す

五十二歳

信玄 のぶのぶ

おろけ 生國を以て いこく

白徳院殿とふ

將軍 しやうぐん 一は之をまてまら

信次 のぶつぐ

十 じゅう 生國 いこく 同前

九歳あり

白徳院殿より佛よりきてまらる

十二歳より

將軍家より一之をきてまらる

系友

ゆあぢ 村繁より一之通河原と号せ

大権現より一之をきてまらる

釣命より一之をきてまらる

系勝

大権現と程より一之をきてまらる

小山より一之をきてまらる

石田治平より一之をきてまらる

系友素子より一之をきてまらる

足利将軍より一之をきてまらる

一之足乃城より一之をきてまらる

うち死

南房

石山世之乃任持還俗
南房と号す 生國を以

系益

修理亮 生國を以持多
長四子正月六十一歳
死す 法名を長

系以

自中以 生國を以
天正十九年十一月廿八日没
下 叙す

長五子十月

大権現 一に之を以てす

後府 一に之を以てす

大坂 一に之を以てす

白蓮院 一に之を以てす

將軍殿より此之書をせしめしる

系本

新吉部 生國同好

孝女八子

大権現即河原電より津原村

即河原系本と書しつるへくまを

書えまつり書みよとせんしむる

とすすこのころ系本八歳たつ

同九子即河原病死のころ書し

と系本よりくさる書りとのへ

幼少方持へら刀同んちるび

飲地を系山系本よりかり

これと銘と

同十一子正月に多水渡ちると

りる

名陸院殿より書しきまつり

同十七年より書しとけり御

切米とお銀と

大坂御陣より一休あり

寛永九年より

将軍家より一休あり

同十年御加増とあり

系考

とある

長十三年

大権現より湯あつよりきてあり

小姓こせうの書とあり

元和二年御比五ご百とあり

駿府より御戸より

名徳院殿とあり

將軍家より一休あり

加増計百とあり

系改

本系集 生國子うぶこの勢多せた

寛永元年四月五日に系少しやう

死し 法名宗次むねつぐ

系次

本系集 生國うぶこ孩河がが

元和九年正月に系少しやう

白漣院殿しらかいん 謁えつ見けん 一いっ 系少しやう

寛永元年に父ちち死し 一いっ 乃なちち連れん

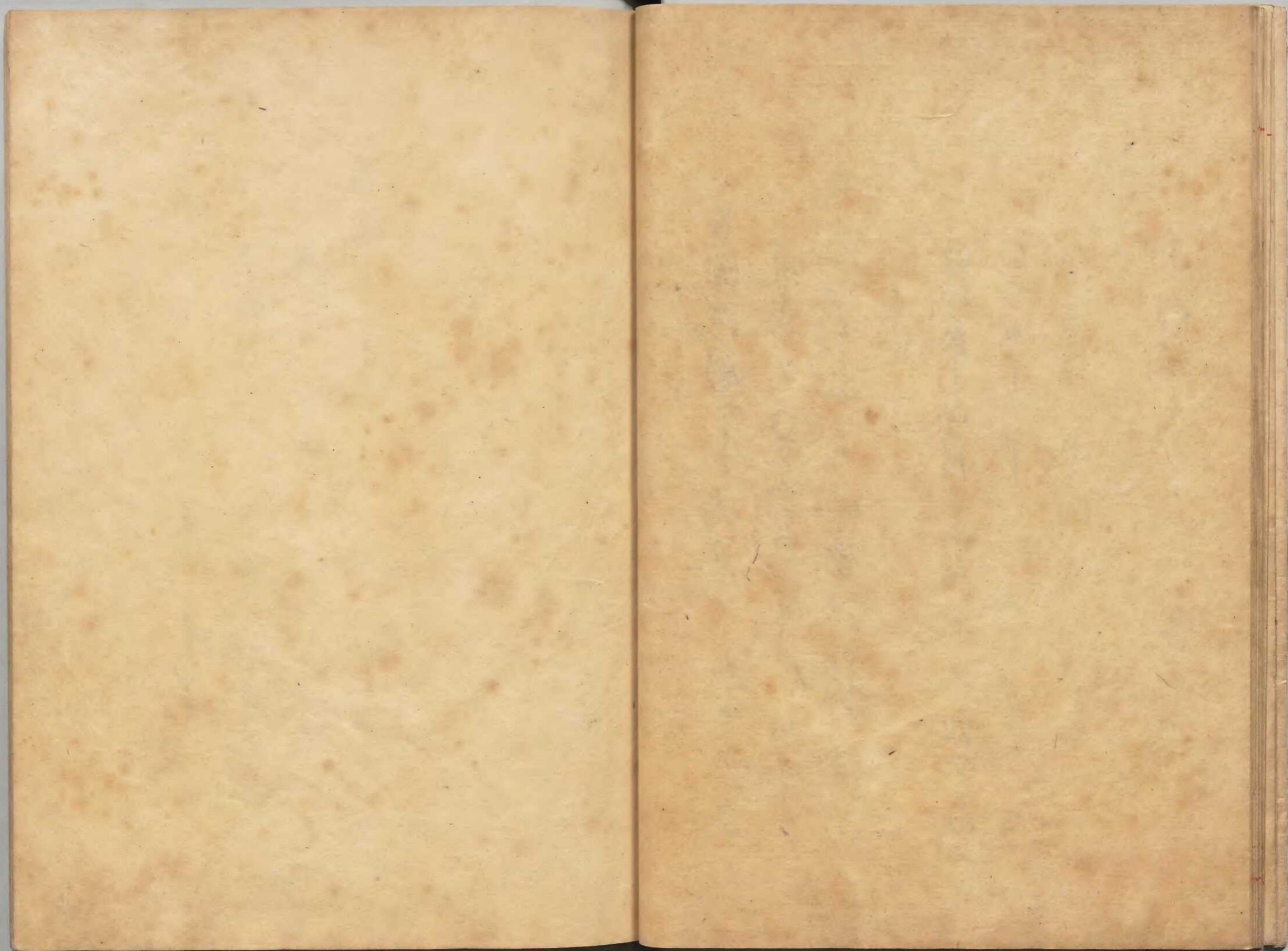
詔みことまひととききぬぬりり珠たま壁かき破やぶ換か乃な改かと

つとむ

日ひ八やち年ねん正月しげつ 系少しやう小こ姓せい段だんのの事こと

とつとむ

家いへ乃な紋もん丸まるののちちにに 横よこ木き瓜うり



藤山

● 京地

苑人

生園子

先祖代に江列甲斐那志野と

領土のら京地

地を

五十七歳

法名步永

資家

理名泉 生國同安

天正十年

東照大行現けりききてり

勢列乃ら水代た友と 杉や

つげらふ

開原河陣の見乃城よ

翁子こ婿むこ子こ彦十郎ひことこもり

らら死し 法名宗月

某

彦十郎

伏見乃ら城よとしくく父ちちとと杉やく

らら死し

資良

理之勝 生まらば

資良死しこのち

大権現し場きりてまらりまら

勢列の内代なとむかせつら

うらち代なとやめらる

大坂西度御陣し

大権現し供もとら

大権現ししけりてまらり大

水とつとむ 法名了和

資良

理之勝

寛永二年

將軍家ししけりてまらり

大坂とつとむ

某

金左衛門

某

八郎某

大行現りけくきりまらふ

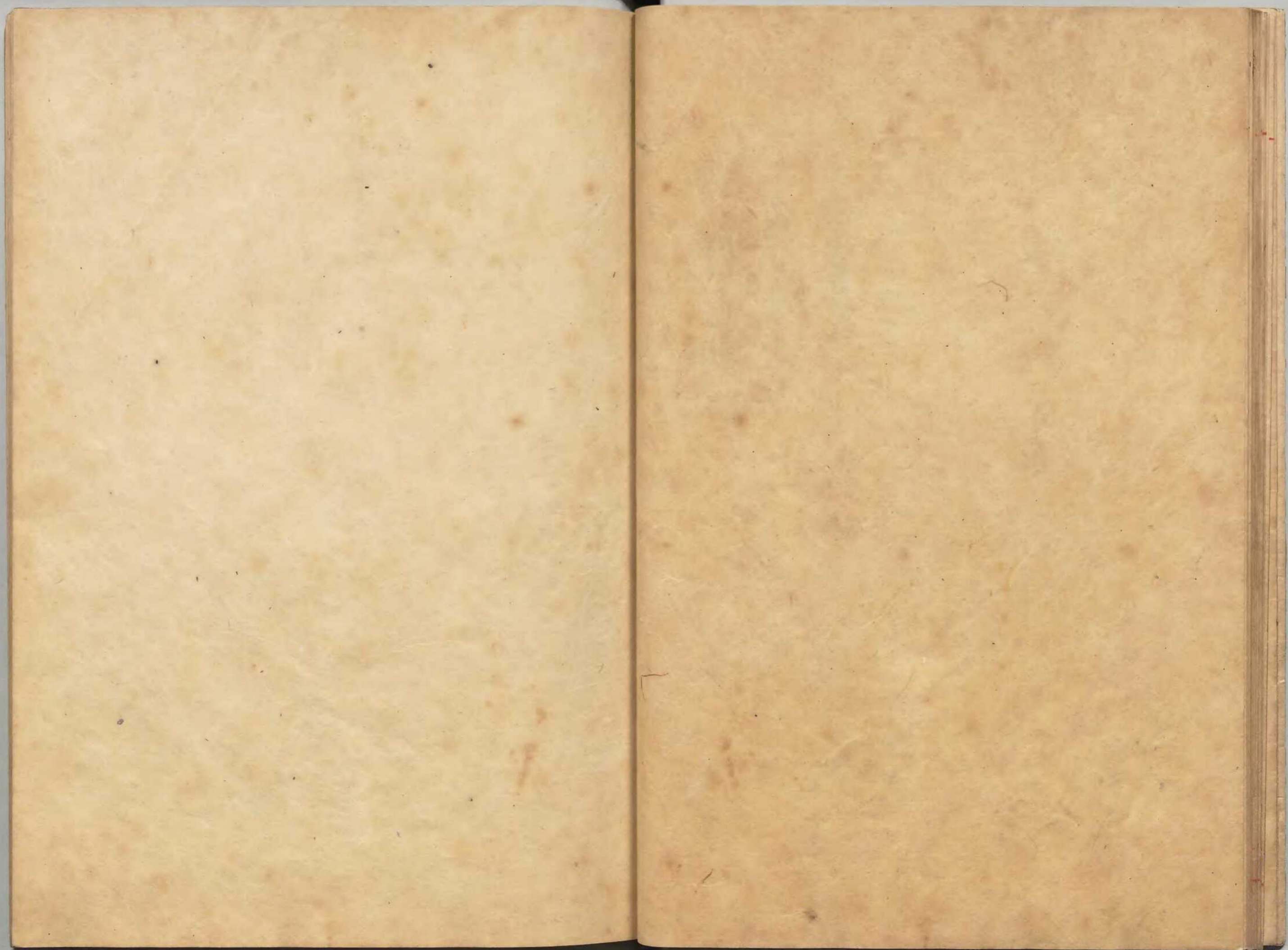
物正ものまさ

竹乃助たけのすけ

台徳院殿とび

將軍家りけくきりまらふ

家乃紋いへのみぶ本紙ほんしニ川がわ



伴いん

●
豐とよ益えき

若わ狭さ守しゅ

生なま小こ迫お江え甲か賀が

天あま正ただ十じゅう之し子こ四よ月げつ九く日にち長なが久く子こ涉せつ

陣じん

大だい権けん規ぎ乃の以い馬ま乃の前まへ一いちとと人ひと之し討うち死し

三十八歳

重盛 しげ

五之末 生國 なまくに

大権現 おほごんげん

白漣院 しろなみ

元和八年八月廿五日 しげ

五十四歳

盛政 しげまさ

五之末 生國 なまくに

元和九年十月 しげ

將軍家 しげ

寛永八年二月 しげ

重盛 しげ

作左衛門 生國 なまくに

大権現 おほごんげん

白漣院 しろなみ

お軍家一に之をてまつり御

具足なすひやまら

寛永十四年三月廿四日

四十五歳に死す

重長

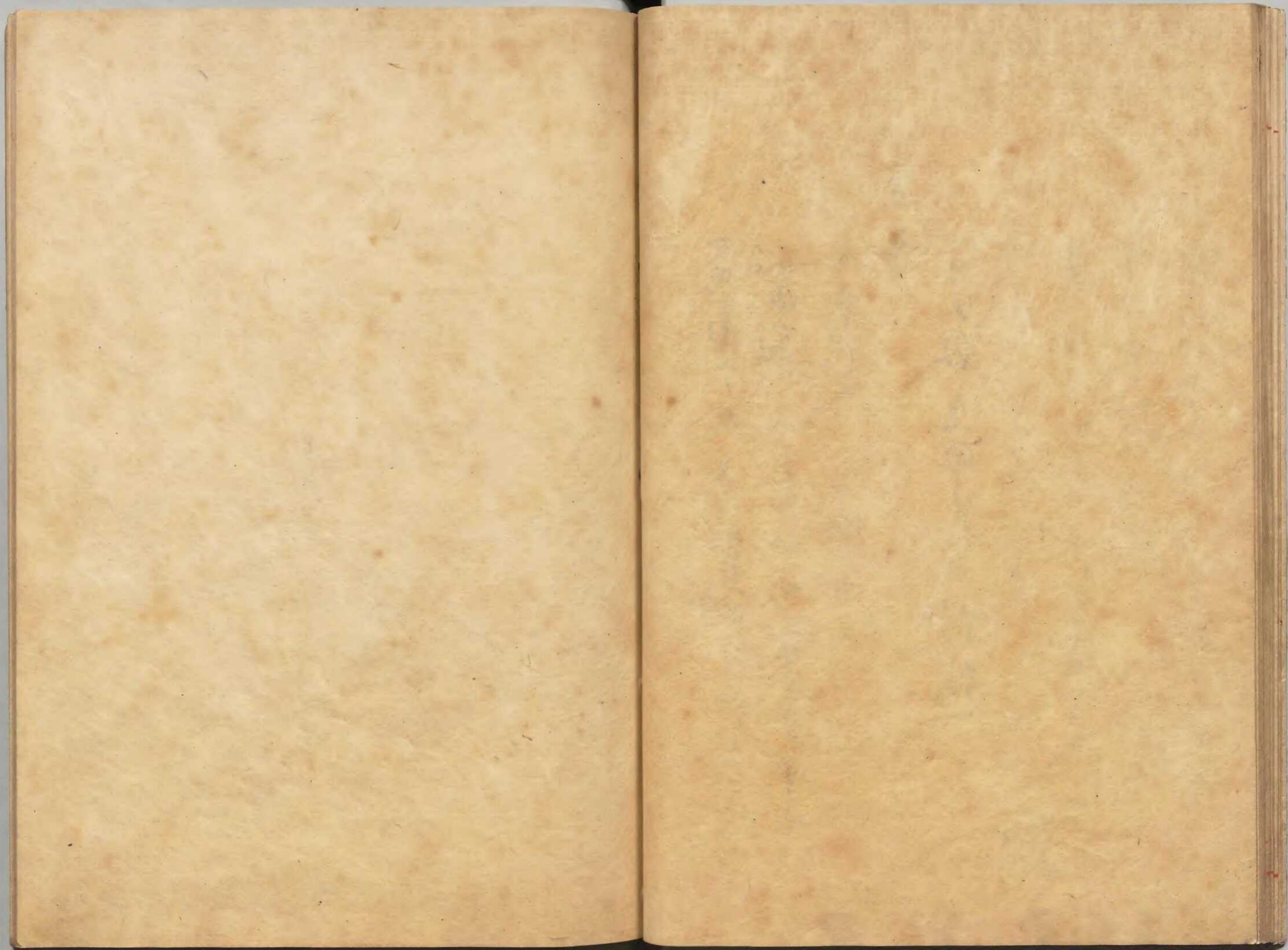
生國回

寛永十四年三月廿四日

四十五歳に死す

寛永十四年三月廿四日
大正十一年三月廿四日

家の紋丸のうちには
林檎



たぢらのしやう
田口姓

牧野の

姓戸録しやうこししくく武内大尺たけうちにに後ごをを

編幅へんぷく片ぺん推おし右みぎにに河内大和國かみのたわのくになるなる市し

郡田ぐんた村むらにに居い住すまをを故ゆかりにに田口たぐちにに

しし号ごうすすままはは家傳けでんのの統すけととおおりり

當時たうじ牧野まきの太馬たうま元もと日ひ内うち通とほ以もつてていいふふ

あり先まへ祀まつりよりより擢おこ庸とらられれ三さん世せい

朝籍一入但源氏といふも先祖
 とまづぬれど金河波氏能大史
 たりといふも傳系傳次一
 族一あらず故一故一源一
 乃系一入あれを田口の姓をま
 り家傳の統分也さすといふ
 も右白一乃一乃一あすとお波
 らす故一別一田口姓を
 挙といふ

重能

河波氏能大史一少月成能一也
 中一守義一也一漢列の人なり

能遠

橋乃外

教能。

田田た束つ一、成束一、此らも、則義
一、此らも、平家没落のち、五條法皇
よ、教能一系、是乃絶

古白

三列れ、伯人、吉田の城と築て、是、吾と
永正三年、伊豫新九郎今川、か、り

此、今國乃、吾と、ひ、さ、て、三、列、一、教、能、と
時、一、古、白、今、川、一、房、と

八月、乃、新、九、郎、東、之、河、の、坊、と、率、て
矢、橋、川、の、邊、よ、と、ひ、く、長、親、自、ら、と

大、一、一、き、く、ひ、勝、負、い、ま、ど、決、せ、と

日、言、ぬ、ま、は、ゆ、り、一、戦、と、や、ぐ、へ、一、と
お、約、一、お、一、入、新、九、郎、吉、田、の

城、よ、一、了、東、之、河、一、割、法、と、吾
吾、と、お、ら、め、く、駿、河、一、一、之、は

九月 長親ながちか主ぬし教しやく多た騎きと率ひらてを田のりに
城しろとせめかこむ衝つ十一月よりり城しろ中
の擗せ斥せきを先まりしりく一族いっくに
二百にひゃく餘あま人ひと城しろをちて士し卒そつを殺ころす
城しろ中ちゆう小せう少せう名な獲とり六七十人むそくじゅうにんを
同どうら右みぎ白しろ一族いっく郎らう後ごといひさく城しろと
死しこえ實じつもくくを殺ころす

梟

田のり乃の字のとあゝあゝ傳つたた忠ちゆうつと号ごうす
實じつ名なをいふとむ乃のち今いま川がは氏ぢより一ひと
中ちゆうに名な田のりに城しろと守まもり 法はふ名な聲こゑ外あへを云いふ

梟

傳つた統とう 法はふ名な以い天てん清せい云い

梟

傳つた次じ

明應二年五月廿八日 清康君教子
騎と車ひく吉田とせめとらん

キヨマツト傳次郎の傳次郎新次郎新次郎
下地地しお教交大しきく子傳次郎

父子三人并し新次郎新次郎一族良
法教百人討死せ 清康君即日を

田の城し入しきし東之河とく
く橋下しし居せ 法名之休位云

某

傳次郎 母を尾列知多郎の人なり

昭乎七月しして夫の家と一のび

お知多郎ししししし傳次郎とむ

北蔵乃村家ししあふ

成室

たづめの名し傳次郎のら仔細と号せ

生玉尾北知多郡

十六歳少く父のくまふ川隼人伝と

うら伊勢乃長徳一郡不流川一巻

あけをあげくをゆくと

朝倉義系江小を祢山一巻法を一巻

あけとまうくふ村成里銚と合

一巻すく小伊勢乃長徳とせめり心時

城中の巻もくふ成里銚下少く

言名とけ外南伊勢濱吉の城曰大河

内乃城之河長藤江小濱井曰日横山

越前摺と合我大坂摺出くまじもれ

ぬまとせむ太六度乃合合よ毎度ま

名すうらら修也大坂一巻りく

せめ口をみる村一十河因横吉和泉

の境よ成里いじんきくひ村和首と

修也一巻す

横列菅家れ城一巻一巻とあす

まじ横列有是乃城とせめ鴨塚のぬま

よとひく種とありせよ名あり
一登擧列長治乃城一揆とせり香丸
中居唐橋大治
乃けあひ一揆の首とせり
天正十年秋春一登武苑北にとり
水糸氏政と大り一登と成里種と
ありて款軍敷走す一登軍と合
て擧列一乃ち城田佐雄

此之長久手合戦一高名と
藩生氏輝奥列妙乃城とせりかこむ
時成里信雄乃使とたると生人
くはらく首級とゆきり氏輝大
一威悦するのち妹婿
よららと長谷川藤五郎
文禄元年朝鮮征伐の時忠列擧列
ありとて軍功あり者乃命病死

わらぬ約しき秀次しつ子孫
いく日どちかくて秀次宮しつ遠坂
石田治部少輔しつ房と
關ヶ原殿おのちしつ島原十将人
之款乃中と突かぬしつ池田之軍討
輝政の軍しつくはる輝政
大権現しつ遠しつ救物とくはら
新築しつ橋列しつ居す
是をいふ

大権現の約命しつあはくはるしつ下向し
台徳院殿しつ揚しつきてまはり命と
しつ幕下しつを侍す還俗しつ
本名傳統しつあはるしつ若用長
務と下ある

日年之ちんれ地とまよふ 約命しつ
しつ子成徳しつ傳統の船名とまはり
伊豫ちしつ号す
日十一年鉄炮同心五十八人とあはる

日十九年夏江戸よりとひくや
五十九より病死 法名通樹

正成

清吉

先成里とむく長谷川者正成に
此之朝鮮へ忠列番列乃城と
せしむ時者正成先成と成里正成
先成より軍功あり者正成朝鮮

乃陣中よりとひく死に故に正成
等母の事

文禄三年後裔よりとひく

大権現より此之寺よりとひく 信よ

正成名依治氏なりといひける事あり

依治の書子より行るいんがも氏を

信がらやと乃の事よ正成の弱き

よて書父よりとひく流落より見

小吉より藤正部よりとひく故より見

氏と月と中より後依治ありあり
むとて換りしるす

日五年使事と行る正成と鉄炮と
遠とけ故し南東中れもと物没と

此と心

長十九年大坂陣の時正成父子
釣命と受けとせりいと追鉄炮と

しめまると身と居執とみる

日廿年五月七日正成陣使あり

坂寺和泉寺并河拂部以陣所と定
陣中より河使と行る城と橋の

ろわすともさ御儀とあり

元和二年

大指現養河のらに戸とありて

名徳院殿と行る之をそとらふ

日三年河使書と行る

日四年目付と行る後意書書水并
監物と國とありたりと創法と書

伊勢内乃とき布衣を著し侍
寛永八年十二月八日病歿
六十 法名玄好

女子

松極市左衛門妻

正京

清吉清

長十九年十月十日子孫府

とひく

大指現しお備しくしはしふしのしれ

同年大坂御陣しらしくし伏しせ

せめはと災しらしり鉄炮しをしるしり

同女年五月七日御侍しあしるしく

味方の騎効しれし時しあしれしとし志しつしむしるし時

御興侍乃士二十人しすしましるしり

同日八日二条しらしるしり法海陣しのしらしるしり

くらしく侍す

元和二年父と相争く以て行

台徳院殿に之をてまつる

寛永八年父正成死す

同九年

將軍家に命ふらりて父が家督を継ぐ

女子

松平右馬助の妻早世

女子

赤井五郎の妻

成信

将監

池田輝政に之を継ぐ

先政に之を継ぐ

成法

宇右衛門

松平氏茂守利隆

少将光政

成徳

傳茂

生玉尾張

長八年

在徳院殿
日十九年
成里死
成徳

將軍家

成勝

伊織

實を將監成徳

と書く子とす

寛永十三年

將軍家

成子

織部

生

名

將軍家

女子

膝

女子

片

成時

教馬

實

く

寛永十五丁

相軍家より此之をそまひふ

家乃紋丸のちらふ之櫃らぶ

牧野まきのの

正育ただひこ

物志ものし

生玉なまたま冬ふゆ河がわ

大権おほいけん現げん一いち江え之の幸さち々々中ちゆう一いちつりつり海うみ書かき二に通とお

以もつ裁さい一いちいい中ちゆう一いちつりつり海うみ書かき二に通とお

忠正

物立郎 生玉回

実たる川邊理之康長二男なる

正を甚く子とす康長が先累代

の先祖一ツとてしり之列

小川志記乃在れ味自より忠正

大権現一ツとてしり大権

一ツとてしり病一ツとてしり

以書と抄ふり

正照

物立郎 生玉武苑

台酒院殿一ツとてしり

長十九年日少迄大坂御陣

一ツとてしり

正友

作十郎

生玉回ちの

寛永九年

將軍家より此へきて申す所

家乃紋裏菊

石川家の紋根藤

大神姓

友林

吾友國結方乃未流也

● 大古

家傳いん一いくく又また祖母いばなのお嶽たけ大だいのの神かみ

ちちのの平へい家け物語ものがたり一い優う波なみ女め嶽たけのの神かみ

空そら表ひら記き一い姫ひめ嶽たけ一いのの母はは

儀同之司 倭國乃女 倭國故何
了く結方乃 庄乃内 蘇栴嗚 一配流
せらふ 倭國乃むとめ なるびちうさ
美人 なる特 殿 國 達
倭國罪とゆら 彼むすめと宮中
へらるるの 宣旨 阿つ時
かむすめ 懐妊すま 此神乃通
すらさるる 女千悔乃 欲
むすたら 民とらり けん ぶらう

春のよきだのかつとくとも

春のよきだのかつとくとも
春のよきだのかつとくとも
春のよきだのかつとくとも
春のよきだのかつとくとも
春のよきだのかつとくとも

平家物語 母乃姓 父を
祖母嶽の 神なる 女被 託と人
この 託を 託と 祖母嶽
大蛇乃 託と 子なる 祖母父

惟基

大友大史 曰東河原ノ梟ヲ世らる

惟盛

白杆冠うすきのくわん

惟俱

惟用

惟榮

徳方之郎 一本ノ惟義いひノつらふ
あふひを教原氏しん

為約

坂五位下 多おあのちのしん 但えんと見ま并だい
七人あり

惟兼いんね

惟綱いんね

文光ぶんこう

孝光こうこう

菟林うりん あき あき

物定ものさだめ

吉郎きちろう あき あき

物光ものこう

定次さだつぎ

四郎しろう あき あき

四郎しろう あき あき

定久さだひさ

次郎じろう あき あき

惟定いんさだめ

四郎しろう あき あき

法名ほふな あき あき

清定

勘解由左衛門尉 法名了也

時定

与左衛門尉

永正四年四月廿七日 与左衛門尉 義極
防列より舟船にて岩和岡場より
流るる同六月八日 一海流とて

時河川流元状

来月十一日 法定以我旨一紙可
抽忍節事 所要以依其功了也
賞也

卯月廿七日

隆元判

岩林とての

文龜二年三月 死す四十七歳
法名了也

惟光

友林の節を射後勘解由た馬の射
永正十八年二月七日の夜友林院
義極海中とあり淡列よありし
のち号と改し〜と海せんとき
時澄増状と〜と惟光と信らる
と出〜と〜
と方板を淡列被移少府取来十

六方被奉少旗能明殿被在伏御入
海と者け初可被抽忍節事書一
以於るる候名可達申山と〜と海と

中り

澄増判

友林勘解由中た馬の友

永祿十二年二月一死す七十と歳
法名了雲

氏教

菟林内苑也

仁長一子

天正二年十月に死す一子

法名了祐

宗政

市宗

大指現一子之をくくす

寛永五年開原湯陣のち大和

國代友和と称せつらるる御自業

の皆済状と以裁す

和列皆済事

大恩より商中へ九年皆済也

仍如件

寛永十六年二月廿八日

菟林市宗

江戸に於て之に病死五十八歳
法名淨真

勝政

市右衛門

大権現寺

白蓮院殿に於て之に病死五十八歳

大坂西河原に於て之に病死

寛永三年八月に於て之に病死五十八歳

雅良

市右衛門

相模家に於て之に病死五十八歳

先祖より代々城列紀伊郡横大地

に於て之に病死

惟次

長吉

家乃紋之本枚

右巴

